

# 美術月評

10月

上村豊

## 文化

10月は山城知佳子氏の第1回「アジアン・アート・アワード」大賞受賞のニュースで始まった。受賞対象は最新作「土の人」(劇場版、2017年)だが、2000年代を通して沖繩を表現のルーツに「復帰後世代」のリアリティーから新たな表現を切り拓き、県外・国外へと活躍の場を広げてきた彼女の活動の軌跡と蓄積が高い評価を得たものだと思う。

彼女のテーマが私的経験から集合的記憶、さらには「歴史」へと拡張されるにしたがい、表現のメディアとクオリティもグローバルな水準を獲得してきた。その一方で「抑圧される側の視点・抵抗・解放への希望」といった表現の核をなすものが、国内最大規模のアートフェアを主催する団体による「授賞」、「中央」からの価値付けといった構図の中でどうあるある種の「標準化」にどう対抗していくのか、今後の展開にも期待したい。

うちなーぐち演劇集団比嘉座「うわーうわーうわー(豚・war・wii!!)」(10月9日、ちやたんニライセンター・カナイホール)

「しまくとぅば」によるオリジナルの舞台を創り出してきた比嘉座。座長・比嘉陽花は、さまざまな形で押し寄せる社会や文化の

「標準化」に抗い続けている。地域固有の日常言語へのこだわりを核に、最小限の道具立て、公民館や高齢者施設など地域の様々な場で行われる入場無料の公演形態は、舞台と客席さら

に劇中の時空と現実の「いる。ま・ここ」との距離を近づける表現の一環であり、同時にグローバルな言語や映像によって標準化され受容される「沖繩」との間にある大きな落差とそれに対する

強烈な違和感の表明でもある。自らが生まれ育った石川伊波の言葉と記憶を掘り起こすことから始まった比嘉の活動は、一見自然で自明な行為に見える。しかしそ

る強烈な違和感の表明でもある。自らが生まれ育った石川伊波の言葉と記憶を掘り起こすことから始まった比嘉の活動は、一見自然で自明な行為に見える。しかしそ

る強烈な違和感の表明でもある。自らが生まれ育った石川伊波の言葉と記憶を掘り起こすことから始まった比嘉の活動は、一見自然で自明な行為に見える。しかしそ

る強烈な違和感の表明でもある。自らが生まれ育った石川伊波の言葉と記憶を掘り起こすことから始まった比嘉の活動は、一見自然で自明な行為に見える。しかしそ

### 文化の標準化に抗う

### 開かれた表現続ける

### 特権から自由な視線

比嘉座「うわーうわーうわー」

高良憲義個展

ウィルソンが見た沖繩

「標準化」に抗い続けている。地域固有の日常言語へのこだわりを核に、最小限の道具立て、公民館や高齢者施設など地域の様々な場で行われる入場無料の公演形態は、舞台と客席さら

に劇中の時空と現実の「いる。ま・ここ」との距離を近づける表現の一環であり、同時にグローバルな言語や映像によって標準化され受容される「沖繩」との間にある

大きな落差とそれに対する強烈な違和感の表明でもある。自らが生まれ育った石川伊波の言葉と記憶を掘り起こすことから始まった比嘉の活動は、一見自然で自明な行為に見える。しかしそ

る強烈な違和感の表明でもある。自らが生まれ育った石川伊波の言葉と記憶を掘り起こすことから始まった比嘉の活動は、一見自然で自明な行為に見える。しかしそ

る強烈な違和感の表明でもある。自らが生まれ育った石川伊波の言葉と記憶を掘り起こすことから始まった比嘉の活動は、一見自然で自明な行為に見える。しかしそ



比嘉座「豆腐協奏曲」より



高良憲義「オスプレイの残骸と安部の海辺」



「ウィルソンが見た沖繩」展会場風景

「現在の」「自覚的」な表現活動として捉えるべきであらう。第20回高良憲義個展(10月10日〜15日、那覇市民ギャラリー) 一年一度の個展で尽きせぬ若々しい創作意欲を見せる高良も、自らを取り巻く「いま・ここ」に向かつて開かれた表現を続けている。何よりそのエネルギーが内に籠って屈折せず、現実との活発な相互作用を生み出す「健全な」制作態度に、世代を超えた信頼感・存在感を感じる。今回主なモチーフとなったのは昨年

末の名護市安部のオスプレイ「墜落」事故。居ても立ってもおられず、現場に赴き採集した事故機の破片を

「ウィルソンが見た沖繩」(9月8日〜10月15日、沖縄県立博物館・美術館 博物館特別展示室) 100年前に沖繩を訪れたイギリス人プラント・ハント、E.H.ウィルソンが、植物調査のフィールドワークで撮影した59点の写真が、標本など植物研究の史料とともに展示された。表現としての写真にフォーカスした展示ではないが、強い印象を受けた。

これらの写真の魅力は、第一に当時最新の機材で撮影されたガラス乾板から引き伸ばされたプリントの高画質であらう。だがそれ

## 絶妙さ希有なセンス 光見いだす過程表現

宮城ヨシ子さん 写真展 新城愛写真展

68歳から写真始めた宮城ヨシ子さんの初個展。会場は、写真と現実の日常空間が地続きでつながっているような独特な活気に満ちていた。屈託のないあつからんとした視線がヨシ子さんの写真の持ち味だが、被写体との間で何かが動き出す瞬間を逃さず、絶妙な構図に切り取る希有なセンスがそれを支えている。

「現在の」「自覚的」な表現活動として捉えるべきであらう。

第20回高良憲義個展(10月10日〜15日、那覇市民ギャラリー)

「ウィルソンが見た沖繩」(9月8日〜10月15日、沖縄県立博物館・美術館 博物館特別展示室)

新城愛写真展「Smoldering Light」(10月18日〜27日、Foto space Reago)

一方、デビュー間もない新城愛は、周囲からの期待・イメージが先行したこと



宮城ヨシ子さん写真展会場風景



新城愛写真展会場風景

視線(学術的、芸術的、政治的...)からも自由である。このウィルソンの対象への等価で自由な視線は、彼がプラント・ハンターの経験で培った自然や世界に対するある種の「倫理」から生み出されたものではないだろうか。一見平板で退屈なほどに静的な画面に映し出された当時の沖繩の映像が、まるで澄んだ湖面のように現代の私たちの目をくき付けにし、黙考を促すゆえんであろう。

宮城ヨシ子さん写真展「Frame Out」(10月14日〜22日、tomari)

(琉球大学准教授)